

早わかり 海蔵の歴史



堀川葛蒲園「葛蒲まつり」
(四日市市三ツ谷町)
平成11年6月6日撮影

はしがき

一六〇一年 徳川家康が東海道に宿場・伝馬制度を制定されてから
 本年は四〇〇周年にあたります。

東海道に沿った海蔵村の歴史をまとめました。

海蔵地区地域社会づくり推進委員会

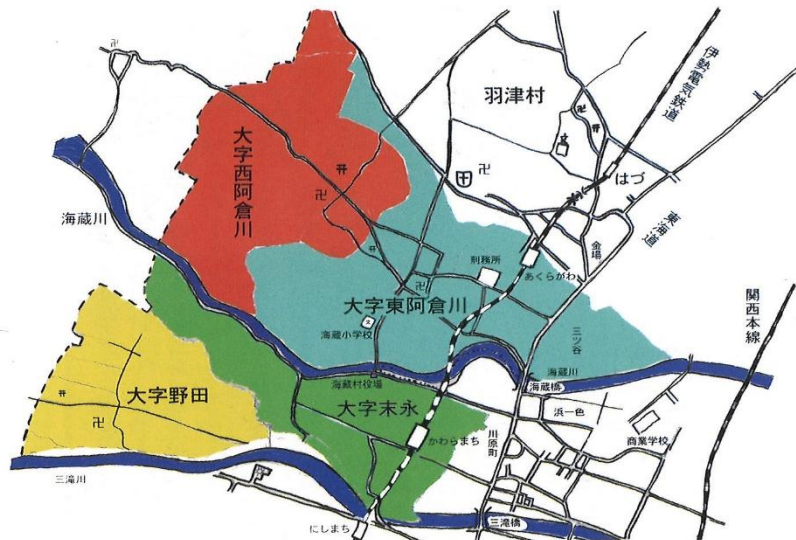
《早わかり》

海蔵の歴史

三重郡海蔵村 四日市市海蔵地区は、今から七二年前の昭和五年（一九三〇）一月一日に四日市市に合併する以前は「三重郡海蔵村」であった。そして、東阿倉川・西阿倉川・末永・野田の四つの大字おおあざに分かれていた。その「三重郡海蔵村」は、今から一一二年前の明治二年（一八八九）四月一日、市制・町村制の施行に伴い、東阿倉川村・西阿倉川村・末永村・野田村の四箇村いずれも江戸時代に誕生が合併して登場した。昭和四年頃の三重郡海蔵村の地図を見よう。大字東阿倉川の東端「三ツ谷」を「東海道」が通っている。国道一号の姿はまだ見えない。また、村内には鉄道（伊勢電鉄線）が通っている。阿倉川駅と川原町駅は、四日市・桑名間の開通に伴い、昭和四年（一九二九）一月三〇日に開業したばかりである。

村内を「東海道」が通っていて四日市宿や四日市港に近かったこと、更に鉄道が開通したことにより、海蔵村（海蔵地区）では早くから商工業が発達した。代表的産業としては、江戸末期に始まった萬古焼製陶業を始め、赤煉瓦や菜種油の生産等が挙げられる。

村のはじまり 郷土資料『海蔵小誌』（昭和三〇年）によれば、村の起源は「海蔵川」にちなんでいる。ま



昭和4年頃の三重郡海蔵村の地図

た、遺跡発掘調査によれば、弥生時代中期の頃には既に集落が営まれており、人々は、湿地に田を作り、森で狩をし、海岸や川で魚を獲って生活していた。

かつて「阿倉川」が海岸であった頃、海蔵川下流の浜辺には漁師たちが暮らしていて、収穫物を貯蔵する蔵(横穴)があった。その蔵は「海人蔵あまくら」と呼ばれていた。この海人蔵から人の一字を抜いた「海蔵(あくら)」が川の名の由来となり、「海蔵川」を「あくらがわ」と読むようになった。そして、いつの頃からか、川の名を「海蔵川(かいぞうがわ)」と呼び、土地の名を「阿倉川あくらがわ」と呼ぶようになった。

「末永」と「野田」の地名も海蔵川にちなんで「末永」は、元は「末長」と記し、海蔵川の河口に広がる長大な砂浜であったことから名付けられた。一方「野田」は、「ヌタ沼田」が転じたもので、かつて辺りが湿地帯であり、往古より三滝川と海蔵川に深く関わって生活してきたことを物語る。

中世の海蔵 律令制が確立した頃(七世紀)には、海蔵の村は、朝明郡の額田(ぬかた)郷と三重郡の柴田(しばた)郷・刑部(おさかべ)郷に属していた。

中世(平安末期〜戦国時代)には、海蔵の村は伊勢神宮領であった。一四世紀半ばに書かれたとされる神宮文庫所蔵の資料『神鳳鈔(じんぼうしやう)』を見れば、伊勢国三重郡内に「飽良河(あくらがわ)御厨」と「野田御

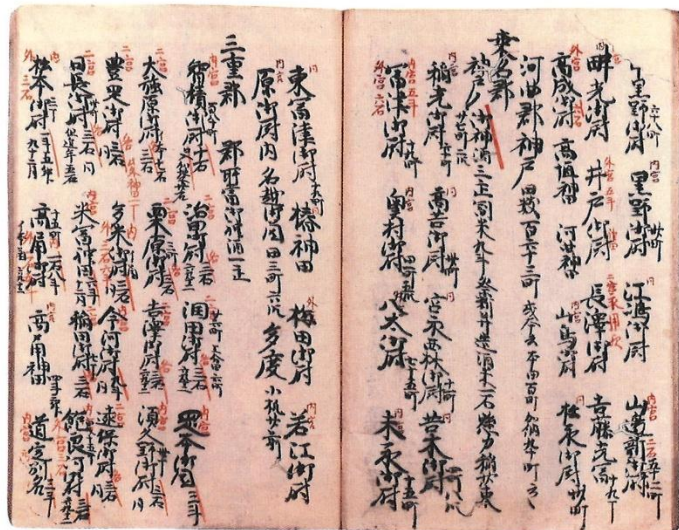
園」、また、伊勢国朝明郡内に「末永名」と記されている。つまり、中世の海蔵の村(阿倉川・野田・末永)は、伊勢神宮領であり、伊勢神宮に米を奉納していたものと推察される。

平安時代の末期には、都では藤原氏を中心に華やかな貴族の文化が栄えていたが、地方では新しい時代の担い手として武士が勢力を伸ばしていた。その代表が源氏と平氏である。この内、伊勢の各地を拠点に活躍していたのが「伊勢平氏」である。

鎌倉時代には、平氏が滅んで源氏が天下を取ったが、伊勢・伊賀方面には平氏の残党がたくさんいて、城を築く者もいた。

戦国時代は、群雄割拠の時代、即ち、強い者勝ちの時代で、各地の豪族が勢力を競い合っていた。『海蔵小誌』によれば、伊勢平氏の残党の子孫であった「伊勢貞経」が阿倉川の地を所領していた。伊勢貞経は東阿倉川字宮前に砦を築き、その一族である館(たち)太郎貞康の後胤を代官として代々東阿倉川の地に置いて、この地方を支配していたという。阿倉川では、当時の下廻しの世相から、北勢四八家の一つであった館氏が伊勢氏に代わって勢力を伸ばしてきたものとみられている。

また、西阿倉川には館氏の居城「阿倉川城」があった。『海蔵小誌』によれば、阿倉川城は、館太郎貞康の弟貞治五代の孫貞長が応永二九年(一四二二)、足利幕



『神鳳鈔』(伊勢市・神宮文庫蔵)
左下に「飽良河御厨」あり

府に請うて築城した『浄覚寺系譜』という。なお、城の位置については諸説があり、西阿倉川の浄覚寺の辺りとか、東阿倉川の「城の腰しろのこし」付近か、加納藩の郷倉(こうぐら)の近くであったと言われる。また、阿倉川城は、天正元年(一五七三)、浜田勢に攻められたことが『勢州四家記(せいしゅうしけき)』(推定・一六三五年)に記されている。いわゆる「阿倉川の合戦」である。阿倉川城は、その後、天正三年(一五七五)、館薩摩守貞清が城主の時、織田信長の家臣・滝川一益に敗れて廃城になったと伝えられる。

近世の海蔵 北勢地方は、織豊期には織田信長・滝川一益・織田信雄・豊臣秀吉・豊臣秀次の領地になったが、慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原合戦後は徳川家の公領となり、海蔵四箇村(東阿倉川・西阿倉川・末永・野田の各村)は、徳川家康の家臣によって桑名城より支配された。

江戸時代に入り、海蔵四箇村は、慶長八年(一六〇三)から享保十一年(一七二六)まで、四日市代官の支配下に置かれた。この間、東阿倉川村と西阿倉川村は元和五年(一六一九)から紀州藩領となり、末永村は近江国甲賀郡信楽代官の支配を、野田村は美濃国笠松代官の支配を受けた時期があった。

享保十一年(一七二六)一月一日、八代将軍徳川吉宗の側用(そばよう)取次人であった加納久通(ひさみち)が

地区地域社会
づくり推進委
員会では、東
海道宿場・伝
馬制度制定四
百周年を記念
して、平成一
三年三月、海
蔵川左岸堤防
の小公園内に
「三ツ谷一里
塚跡」の石碑
を建てた。



「三ツ谷一里塚跡」の石碑

たことから、江戸中期の頃、三軒の家が移り住んだのが始まりと言われ、「三ツ家」と称していたが、後に「三ツ谷」に転じたと伝えられる。

東海道の三ツ谷には、かつて「一里塚」があった。しかし、その場所は昭和二〇年代に海蔵川が拡張された際、川の中に取り込まれてしまった。元禄三年（一六九〇）に描かれた『東海道分間之圖』によれば、三ツ谷の一里塚は、東海道が海蔵川に突き当たった辺りに記されている。

そこで、当地地域社会づくり推進委員会では、東海道宿場・伝馬制度制定四百周年を記念して、平成一三年三月、海蔵川左岸堤防の小公園内に「三ツ谷一里塚跡」の石碑を建てた。

江戸時代の初

め、徳川家康が東海道をはじめとする五街道を整備した際、江戸日本橋を起点として一里（約四町）毎に街道の両側に土を盛り、榎や松を植えて旅人の目印にしたものである。

萬古焼「四日市萬古」の始祖は、山中忠左衛門である。忠左衛門は末永の人で、文政四年（一八二二）一月五日、朝明郡伊坂村の街道筋の豪家に生まれ、山中家の養子となった。その後、天保二年（一八三一）、近郷の小向（おぶけ）村に名工・森有節が沼波弄山（ぬなみろ）うざんの後を受け、桑名藩の御用窯を開窯した。

山中忠左衛門は、森有節の作風を愛し、その作品を収集しているうちに、自分自身もこのような作品を焼成してみたいと考えるようになった。当時、阿倉川でも近江信楽（しがらき）の職人によって陶器が製作されていたが、忠左衛門は、もっと鑑賞価値の高い焼き物をこの地で作ろうという気持ちから窯を築き、苦心の末、ようやく成功の域に達したという。

山中忠左衛門の偉業は、萬古焼を、美術工芸品としてではなく、大衆の生活必需品として、これを量産するという「地場産業」の礎を築いたことである。江戸末期の頃には、街道筋の住民は宿駅四日市で生計を立ててきたが、明治維新で参勤交代の制度が廃止されたため、当地は衰微し、多くの失業者が出た。この窮地を救ったのが萬古焼産業であった。山中忠左衛門のお

八千石を増加されて一万石の大名となった。この時、東阿倉川村に陣屋が置かれ、当地は八田藩東阿倉川藩・加納藩領となった。陣屋の所在地からすれば、東阿倉川藩と呼ぶべきであるが、藩の重要な財源であった員弁郡内の所領が治田（はつた）郷（現在の三重県員弁郡北勢町）で、江戸時代には銀や銅を産出する鉱山があったと称したことにもなると、八田藩と呼ばれることが多い。

文政九年（一八二六）、第五代藩主加納久壽（ひさともの時、東阿倉川の陣屋は、上総かずさ一宮現・千葉県長生郡一宮町）に移された。これにより、東阿倉川藩・八田藩の名称は廃止され、以後、上総一宮藩と呼ばれるようになった。

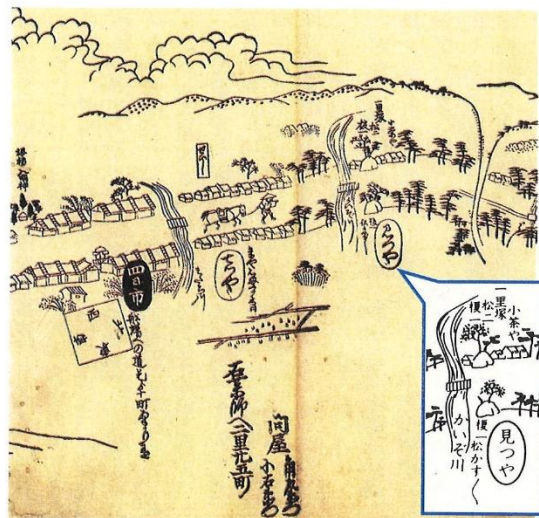
その後、明治二年（一八六九）六月二三日、加納久宜（ひさよし）が上総一宮藩主の時、版籍奉還に遭遇した。そして、明治四年（一八七一）七月一日に廃藩置県となり、同藩は廃止され、大名としての加納氏の幕は下ろされた。つまり、加納藩は、初代の加納久通（加納家第九代）から第八代の加納久宜（加納家第十六代）まで、一四五年間、徳川幕府の政權下で藩政に携わったことになる。

一方、江戸時代の末永村と野田村は、はじめ桑名藩領、元和二年（一六一六）から幕府領、享保一一年（一七二六）からは西条にしよう藩領となった。

西条藩は、加納久通と同じ、八代將軍吉宗の紀州藩主時代からの側近であった有馬氏倫（ありまうじのり）が

高一万石の大名となり、伊勢国河曲郡西条村（現・三重県鈴鹿市西条町）に陣屋を置き、伊勢国の所領の支配を行った。有馬氏は、後に西条から関東へ陣屋を移転し、上総五井（ごい）藩、下野しもつけ（吹上ふきあげ）藩と呼ばれた。

東海道の三ツ谷「三ツ谷」は、元は三重郡東阿倉川村の一部であった。東海道が同村の東端を通ってい



『東海道分間之圖』（四日市市立博物館蔵）

「見つや」～「四日市」の部分を抜粋

陰で人々は職を得て、生活の困窮から逃れることができた。

山中忠左衛門は、明治二年（一八七九）、五八歳でその生涯を閉じたが、萬古神社の創建に際し、祭神に加えられている。



沼波弄山が
萬古焼に
押した銘印

なお、「萬古」の名称は、陶祖の沼波弄山がその作品に「萬古不易」の印を押したことに始まる。

海蔵川

海蔵川は、自然の猛威によって、度々、その流路を変えてきた。私達の祖先がこの地を開墾し、灌漑と水害防止のために、永い年月をかけて幾多の工事を施し、その生活のために闘ってきた労苦は、計り知れない。『海蔵小誌』には、東阿倉川の「百間堤」や末永の「山家堤」等の築造工事が記されている。

末永の山家堤は、古い海蔵川の流路の跡で、その川沿いの道は、末永村から三重郡や朝明郡の奥地へ行き来する道であった「千種街道」の前身である。

末永の横手から南に折れて、「蒲（がま）の川」を流れて浜（いそ）はまのいっしきの南で三滝川に合流していた時代もあった。その後、明治八年（一八九九）の大洪水で北へ切れ込み、現在の流路となった。海蔵川の古い流

路である「蒲の川」は、現在でも東海道を横切る小川として残っている。

海蔵神社 東阿倉川村の村社で、創建年代は不明。江戸時代には「牛頭天王社」と呼ばれたが、明治三年（一八七〇）に「鮑良川神社」と改称した。

明治四〇年（一九〇七）、当時、東阿倉川村内にあった諸社を合祀した。大正四年（一九一五）、現在の呼称「海蔵神社」に改称した。祭神は素盞鳴尊。

御厨鮑良河神社

古くから浄覚寺の守護神としてあったものを、この地の産土神北山社として祀られていた。明治二年（一八八八）、現在の呼称に改称した。祭神は建速須佐之男命。

野田神社

江戸時代には、三重郡野田村の牛頭天王社として栄えていた。明治時代に現在の名称に改称した。祭神は建速須佐之男命。

神明社

往古から御厨の地に神明社を奉祀する風習があり、末永村の当社はこれに従ったものとされる。祭神は大日靈貴尊。

多度神社

明治一八年（一八八五）二月、桑名郡の多度神社を觀請して誕生した。旧社域は東阿倉川村の一里塚跡にあった。明治四〇年（一九〇七）に海蔵神社に合祀された。その後、昭和一〇年（一九三五）に分祀し、再び多度神社が建立されたが、戦災で焼失したため、昭和二年（一九五二）に再建された。祭神は天津彦根命。

上野山眞楽寺

宗派は浄土真宗本願寺派。本尊は阿弥陀如来。往古は天台宗の寺であったが、応仁元年（一四六七）、浄土真宗に改宗したと伝えられる。

田端山唯福寺

宗派は浄土真宗大谷派。本尊は阿弥陀如来。同寺歴に、文正元年（一四六〇）一月二〇日に南勢の武士・田端十郎政元が来て庵主となつてこの寺を創建したと伝えられる。

海蔵山浄覚寺

宗派は浄土真宗本願寺派。本尊は阿弥陀如来。館太郎貞治が創建し、往古は天台宗の寺であったが、文明一六年（一四八四）、浄土真宗に改宗したと伝えられる。

永照山正福寺

宗派は浄土真宗大谷派。本尊は阿弥陀如来。創建年代及び創建者は不詳。往古は天台宗の寺であったが、永正一二年（一五一四）、浄土真宗に改宗したと伝えられる。

仏法山悟真寺

宗派は浄土宗鎮西派。本尊は阿弥陀如来。県指定文化財（昭和二年四月一二日、三重県有形文化財に指定）の本尊木造「阿弥陀如来立像」は、平成一二年一月二四日、本堂が火災に遭った際、焼失した。

東阿倉川イヌナシ自生地

イヌナシは、日本の野生

ナシの中で最も原始的な種で、その果実の大きさは直径1cmほどである。花は純白で、春の満開時には樹木全体が真っ白になり、大変美しい。イヌナシは、明治

三五年（一九〇二）四月一三日、当時、四日市市四日市高等学校（現・四日市市



東阿倉川イヌナシ自生地

立中部西小学校の教員であつた植松栄次郎、寺岡嘉太郎、今井久米蔵の三氏によって発見された。



イヌナシの標本木

その後、牧野富太郎博士によって命名され、明治四一年（一九〇八）、世に紹介された。新種イヌナシの標本木の自生地は、学術的に極めて価値が高いため、大正一一年（一九二二）一〇月一二日、国の天然記念物に指定された。

西阿倉川アイナシ自生地 アイナシは、イヌナシと栽培ナシの中間の種という意味で命名された。明治三六年（一九〇三）六月一〇日、当時、四日市市四日市高等小学校の教員であつた植松栄次郎、寺岡嘉太郎、今井久米蔵の三氏によって発見され、その後、牧野富太郎博士の鑑定の結果、新種であることが明らかに

同博士によって命名され、明治四一年（一九〇八）、世に紹介された。

アイナシの花は、純白でイヌナシより大きく、直径二〜三cmで栽培ナシの花と同じくらいである。果実もイヌナシより大きく、直径二〜三cmである。葉もイヌナシより大きい。

アイナシ自生地は、発見当時はこしがなく、学術上極めて価値が高いため、イヌナシ自生地と同じく、大正一一年（一九二二）一〇月一二日、国の天然記念物に指定された。



西阿倉川アイナシ自生地



花菖蒲「肥後系 玉津島」
(三ツ谷町・堀川菖蒲園)

《早わかり》海蔵の歴史

平成一三年一〇月一四日 第一刷発行
平成一四年 二月二八日 第二刷発行
編集・発行 海蔵地区地域社会づくり推進委員会

千五一〇・〇八〇五

四日市市東阿倉川六二二一

(海蔵地区市民センター内)